参考資料２

第２回　第６期中原区区民会議　課題調査部会　会議録

日　時：平成 28 年 12 月 8 日（木）午後 4:00～午後 6:00
場　所：中原区役所 5 階 505 会議室
出席者：井上（部会長）、梅原（副部会長）、伊藤、内田、児玉、中森、田邉、関口、鈴木（晴）
【委員９名】
高橋副区長、村田危機管理担当課長、鈴木企画課長、小栗担当係長、中野職員
【事務局（中原区役所）５名】
岩下【コンサルタント（㈱カイト）１名】

１　開会
開会宣言
資料確認
会議の公開について

２　会議録確認委員の選任（進行：井上部会長）
前回会議で決まった「部会長・副部会長を除いた名簿順で会議ごとに１名の委員を指名」の方式を受け手、鈴木委員が務めることとなった。

３　検討テーマ「（仮）災害に強い、ユニバーサルなまちづくり」について
（進行：岩下（コンサルタント））
○資料１に基づき、各委員から前回会議以降提出のあった課題・ターゲット・課題解決の方向性や狙い等について、内容を整理した。
○資料２に基づき、取組提案の検討に向けた論点整理を行った。
【意見交換】
井上部会長　率直な感想は、皆さんの「災害に対して何かやっていかなくては」という思いがよく表れているということ。視点やターゲットは様々だが、「人と人とのつながりをしっかり作っていこう」が共通項であり、その機会を増やしていく事が今回やらなければいけないところではないか。
イベントにしても周知にしても、効果的な手段を考えていくことが重要だ。また提案に際しては、核となるものが何か必要だと思う。例えば「避難所体験」を核にする。他の課題を軽視するのではなく、何か核を据えて、そこに人を集めることで、その他の課題も併せてカバーしていくことが可能ではないかと思う。
内田委員　今回で取組提案を絞り込んでいこうということか。
井上部会長　そういうこと。何をやっていったらいいのか、骨格を作る回だと考えている。
内田委員　絞込みは多数決になるのか。それとも皆がある程度共通して興味を持てるアイデアを磨き込んでいくような形になるのか。
井上部会長　絞り込みの判断基準をどこにおくかは悩ましい点である。資料２の「提案検討のポイント」を参考にしたい。特に、「区の特徴や現状」を私達なりに捉えて、「緊急性・

優先性」を踏まえた意見をぶつけ合って、決めていければと思う。

内田委員　一般区民の方に「明日起こるかも知れない」というような切迫した議論で訴えていくのか。それとも「日頃から備えましょうよ」「何かあったら助け合いましょうよ」という様なトーンで呼びかけていくのか。

井上部会長　私はどちらかというと後者と考えている。危機感ばかりあおっても、それに応じた動きが実際にできるかどうか疑問である。

内田委員　先日参加した武蔵小杉駅前の避難訓練で、不特定多数の方々に呼びかけていくことの難しさを感じた。隣にいる人を全く知らないという状況の中、前年の訓練にも参加していた人が勝手に「こっちよ」と先導していたり、意識や動き方がバラバラだった。周辺の信号を止めて警察官が誘導していたが、大災害の際に、実際にそれが可能なのか疑問である。

　情報発信も必要だが、情報は過多になっても困ることがあると感じている。知識を持ちすぎると「あれはどうなっているのか？」「今年はどうだ」と文句が出る。知らないと知りたいのですが、知っていると、知識をひけらかしてしまう。

井上部会長　情報の与え方次第だと思う。知識を渡すのではなく、「自己防衛し、自発的に動けるようにしよう」、「互いに助け合おう」と発信することが重要だ。人との関係づくりがないと成り立たない部分が今回の鍵であり、必要なアプローチではないか。

伊藤委員　東日本大震災の時、この付近は震度５で屋外にいても電線などがかなり揺れていた。自分はかなり慌てて逃げ出したが、近所の方々は高齢の割にのんびりしているなど、案外冷静な人が多かった印象である。

　４、５年前になるが、家庭でできる備えや段ボールで作る簡易トイレなどを教わった事がある。予備知識の普及も必要ではないか。自分のことはある程度自分で守らなければいけない。

関口委員　残念ながら他人事になってしまう面がある。TV や訓練で見ても「大変だな」くらいしか思わない。訓練にどれだけ真剣に取り組めるか、本気度が問われる。ただ動員されたから参加している人は訓練の意味が薄れてしまう。人間はやはり自己中心的な面があり、特に最近はそういう雰囲気も多い。ここを解決するのは難しいが、何とかしたい。また、何もない時には冷静に動けても、いざという時にどう動けるかはわからない。

井上部会長　「他人任せの訓練」は効果が薄いということか。自発的にできるような内容を考え、実になる防災訓練をしたい。

田邉委員　先日、新城地区でも防災訓練が実施され、参加した。煙の中を避難する訓練をしたが、10 年くらい前に体験した時と感覚が随分違ってびっくりした。「また同じ訓練をやるのか」と思っていたが、そうではなかった。例えば「さくらまつり」など、人が集まるイベントで、起震車や煙体験など用意し、動員ではない形でやってみるのも良いのではないかと思う。

伊藤委員　やはり訓練は数をこなさないといけない。年代によって感じ方も違う。だからこそ私は「毎回参加してください」と言っている。繰り返すことによって、頭でわかるだけでなく体で覚える。一方で「また同じか」と言われないように「今年は仮設トイレ設置」など、訓練内容を毎年変えている。起震車などはスケジュールの都合などで、なかなか毎

年呼ぶことはできない。

田邉委員　起震車は市内に 2 台程度しかなく、引っ張りだこなので、使用する場合は調整が必要である。また起震車を使用する場合はある程度広い場所も必要である。

伊藤委員　以前は校庭に起震車に入れるのを嫌う学校もあった。近年はそういうこともなく、協力的である。また私の町内には関西で震災を体験した方がいるが、熱心にみんなに体験を話してくれ助かっている。実際の体験者の話は説得力があり、みんな耳を傾ける。理事会などでもお話いただいている。

井上部会長　正直に申し上げると、救命講習などは受けているが、地域の防災訓練は参加経験がない。これまで参加するきっかけがなかった。

梅原副部会長　避難所生活体験ができると良いと思う。ボーイスカウト、ガールスカウトの活動で、保護者も呼んで行うことがある。普段関心の低い方々も集まってくる。経験の有無は本当に大きく、体験の機会はできるだけ多い方が良い。煙中避難体験などは、本当に前が見えず、どちらに進んでいるのかわからなくなる。

伊藤委員　煙は本当に怖い。実際の火災発生時は煙が熱く、吸い込んで喉を火傷するとなかなか治せない。病院の方から口は必ず湿ったハンカチ等で覆うようにすることが大切だと聞いた。そういった知識があるだけでも違う。

内田委員　ここまで話題になっている訓練は、誰かが設定してくれている場に参加している形の訓練である。私も地域のそのような企画に 20 年以上参加してきたが、東日本大震災の経験をきっかけに、このままで良いのかと思うようになった。訓練の話を聞いても、誰がやっているのかとまず考えるようになった。様々な体験にしても、消防署まかせになっていて、段取りだけになっているのではないか。

大災害発生後の避難所開設は地域が自らやっていかなければならない。私の地域では、とりあえず町会のメンバーが、自己安全確保の後に集まってきて行う形を目指し、昨年、避難所開設訓練を実施した。危機管理室からかなり分厚いマニュアルをいただいたが、なかなか全てを消化はできていない。小学校も昼間に災害が起きた場合は、まず子ども達を守らなければならない。車中避難生活を選んだ人がエコノミー症候群になってしまうこともある。体育館で寝る場合に寝床や壁はどうするのか。段取りして避難者を迎えるのも地域であり、町会のメンバーが要になる。その時にお互いに顔を見知っていれば、「〇〇さんは大丈夫だった？」「あそこのおばあちゃんは大丈夫だった？」とできるのが近所である。民生委員やスポーツ推進委員などは近所の方々を知っている。

最近知ったのは「避難所の生活は最悪」だということだ。段ボールの仮設トイレに用を足すのは大変なことである。プライバシーもない。自分の家で過ごせるのであれば、本当は一番いい。でもみんな「避難所に行けばなんとかなる」と思っている。「自分の家や備蓄を見直しましょう」と言いたい。ある会合で「うちの町会は二千人いて、こんな地域備蓄倉庫じゃ、生きていけないじゃないか？」「どこに保管するんだよ！？」といった自治会長がいたが、まず自分で、各個人で備えておこうという意識がないのか。「地域や行政の備蓄に頼るな」と言いたい。

情報については、誰がその情報を欲しいのか、具体的に考える必要がある。例えば「怖くてしょうがない」「どこに言ったらいいのかわからない」という一人暮らしの方。その

方が欲しい情報をもっているのは民生委員や町会長だが、伝達する方法がない。地域単位でどう伝えるか。発信していくことも必要だが、各人が情報を待っているのではなく、自ら出て行って取りに行く意識も必要だ。

児玉委員　車いすの方などには「自分で出てこい」とは言えない。お隣やご近所同士の連携が必要である。

内田委員　となり近所のお付き合いは最低限していて欲しいと感じる。

児玉委員　挨拶しても、何も返してこない方もいる。若い方ばかりとは限らず、年配の方にもいる。近所の人間関係が崩れてきている。

内田委員　めげずに繰り返していくことが必要だ。きっと恥ずかしがり屋の方なのでしょう。

コンサルタント　どこに一番働きかけていったらいいか。自発意識をどう引き出すかをまず考えるのか。それとも隣近所の関係をどうつくるかということから考えるのか。

井上部会長　伊藤委員や内田委員と、私の立ち位置の差を感じています。私の様な者からすると、まず機会をつくること。機会を通じて体験し、認識や知識を育てていければと考えている。それには「避難所運営訓練」が良いと思っている。伊藤委員や内田委員は「誰が担当か」「隣り近所の人間関係が大切」などの話をされているが、私はまだそこまで意識が行きついていない。一般の区民も私と同様の方が多いのではないか。まずは経験することによって初めて近所の人間関係の大切さに気付くのだと思う。この辺りが、意見がまとまらない原因ではないか。

内田委員　知っている人と知らない人は差があって当然である。経験することで深まっていく。

井上部会長　性別や年齢などを限らずにとにかくいろんな人に参加してもらう機会をつくろうという考え方もある。

内田委員　避難訓練に参加経験のない方の意見が欲しい。どんなことを知りたいと思っているのか。

井上部会長　あまり危機意識がなく、自分は安全だと思っている。もしくは興味がなく、特に何か知りたいとは思っていないのではないか。

　私は住んでいるマンションの共用部分の清掃活動に合わせた防災訓練には参加したことがある。機会を増やしていくには防災訓練と、何か楽しみや魅力のある他のプログラムと組み合わせていくことも必要ではないか。2 年前に川崎フロンターレで、等々力競技場に宿泊する企画を実施した。その中で区役所にご協力いただき、防災訓練も実施した。元々は試合に向けた動員の企画だったが、時期が七夕に近かったことから「夜の天体観測」の企画が生まれ、円谷プロとの連携で「宇宙つながりでウルトラマンに来てもらおう」という企画に繋がった。さらに競技場に宿泊や防災プログラムも盛り込むことなどで実現した。参加者には大変好評で、地域のためにもなった活動だったと自負している。

内田委員　防災とは全く違った観点が入ってくるのも、知ってもらう為には良い。

井上委員　親子サッカー教室などの形だったら、川崎フロンターレでも協力が可能かと思う。例えばサッカー教室の後に小学校に泊まって、仮設トイレの設営体験などもする。地域で参加して知り合い、仲良くなるきっかけをつくる。「みんなで協力」というキーワードで、チーム競技であるサッカーともつなげられると思う。

内田委員　参加している人に役割を与えることが重要だ。中学生や高校生などの世代に参加してもらえれば、体験を覚えていてくれ、将来につながる。

関口委員　防災訓練だけでは人がなかなか集まらない。既存のたくさん人が集まっているお祭りやイベントの中で、仮設トイレの設営や煙中避難など何か一つでも良いので体験する。ついでに体験するきっかけをつくる。多摩川の「水辺の楽校」では、市から防災のアルファ化米を提供してもらい、防災紙芝居がプログラムの中に取り込まれている。こうした積み重ねが大切ではないか。参加している子ども達の防災知識が自然に増えていく。

田邉委員　年齢層に応じた企画が必要だ。フロンターレであれば、親子世代がターゲットになる。例えば体育館での落語会と合わせた防災訓練ならば高齢者世代が集まってくるかもしれない。「防災訓練」と名がついていると、構えられてしまう。参加者の幅が出てくるような様々な企画を小刻みに展開できれば、より広い層に浸透していくのではないか。企画は大変そうだが、そういう方向性で考えたい。

中森委員　災害発生時に本当に避難所運営がうまく機能するのか心配だ。

伊藤委員　避難所運営を担うリーダーの育成という課題がある。私の地域の町会では、理事ではなく、数年の任期で交代する役員の方々にリーダーを担っていただくために、いろいろ覚えていただける様な取組を進めている。避難所には設営から、人の受入など本当に様々な課題、役割がある。

中森委員　知識があるだけで、いざ地震があった時に、本当にそのとおり動けるのか。私は8月に多摩区の避難所で訓練に参加したが、設営しているのを見るだけで、設営体験はなかった。

内田委員　参加したことのない方にはまず参加していただく。一度見ていただいた方は、次は体験していただく。徐々に高めていければよいと思う。国際交流センターでも来年2月にも訓練が計画されているので、その時には先日参加された方々が、体験したり、運営側に少しでも周っていただければと思う。

梅原副部会長　危機管理士という資格があり、二級、一級などあるが、何回か講習を受ける事で認定が得られる。それを持っていれば、避難所運営において、客観的にもリーダーの役割が果たせることが示せる。

伊藤委員　資格を持っているだけで、そんなにうまくいくのか。

井上部会長　現状の避難所運営訓練では、どのくらいの体験ができるのか。なかなか立ち上げのところから運営まで、一度に体験するのは難しいのでは。

事務局　中原区内では、28 の避難所が学校等で指定されており、どこの町会がどの避難所の運営を担うか決められている。訓練の頻度はそれぞれだが、どの避難所でも毎年避難所運営の訓練ができるように、区役所が一緒になって取組を進めている。その為に避難所運営のマニュアルの雛形を作成し、地域における役割分担を、町会の方などを中心に事前に決めながら、訓練を進めている。

内田委員　町内会の役員だからできるという事だけではなく、避難所に来てくれた方々にもできる事はあると思う。

井上部会長　避難所に集まってくる一般の方々に担い手になっていただくにはどのようにすればいいのか。きっかけづくりをどうすればよいのか。

内田委員　「お願いします」という姿勢ではないか。役割別の班を事前につくっていても、訓練や実際の災害の際に全員が集まることはなかなかない。その時にちょっと周囲を見て、例えば「あなたは元気で物が運べそうだから、救護班に入って」と言えるリーダーが必要だ。私の地域でも先日避難所運営マニュアルを作りました。30~40 ページあるマニュアルを重要な点に絞り、4 ページほどにまとめた。手を挙げてくれる人がいたら、大歓迎で受け入れられる体制が必要であり、どんどん巻き込んでいき、お互いに学んでいく姿勢があれば、何十年やっていても、訓練は新鮮に感じる。私の地域でも車椅子の方が新たに参加するなど、毎年新しいことがある。小学校の体育館は段差等が車椅子の方には使いにくい場所があることもわかった。避難所にはなっていないが、国際交流センターはバリアフリーで避難所として使いやすいと思う。

中森委員　5 年前の東日本大震災の時、交流センターは発電機があり、停電しても灯りが付いていたので、多くの方が避難してきたと聞いている。仕方がないので「井田中学校に行ってください」とご案内していたようだ。東北で起きた地震でもそのような状況なので、関東でもしあったらどうなってしまうのか心配だ。

田邉委員　マニュアルがあると、きちんとマニュアルにそって、全て準備が整ってからやろうとする。「私に何かできませんか」という人が来ても、マニュアルどおりにやるので精いっぱいで、「今はいいです」と言いたくなってしまうのではないか。いざという時に「これとこれは手伝えます」という心構えを各人がもっているのが理想ですが、現実には大変だなと感じた。

コンサルタント　まずは参加のきっかけづくり。その為には、地域のイベントやお楽しみの企画など、何かと防災訓練を組み合わせる。サッカー教室、水辺の楽校、ボーイスカウトの活動などの案も出た。防災紙芝居の話も出たが、より多くの方に経験していただく為のツールを何か考えてもよいかもしれない。

次の段階は、自発性を育てる。これは危機感を持っていただいて、各個人で備えていただくことにも繋がると思う。罹災体験者の話を聞いている地域の話があったが、例えば提案として、区内で経験を語れる方や講師をリストアップして紹介するような形もあるかもしれない。

避難所運営については、マニュアルができ、訓練が始まったところで、総合的な訓練はまだなかなかできていない現状かと思う。運営側からの視点では、リーダーづくりという視点もある。

以上のどのあたりを今回の提案の中心にしていくのか。

事務局　避難所運営訓練をやるときに念頭に置かなければならないのが、その地域の成熟度。例えば地域から知識が無い方も大勢含めた 300 人の老若男女が集まってくる訓練があるとする。真に成熟した地域であれば、行政もいない中で、いきなり自分たちで避難所をつくり、運営してみてくださいという訓練も可能かと思う。実はこの形が一番、現実に近い。しかし、未成熟の地域でこれをやれば、何も進まず、「ふざけるな」ということになりかねない。未成熟の地域で訓練を行う場合は、「この人が学校の先生。消防、警察、役所はこの人です」「ではこの人たちの言うとおりにまずやってみましょう」。そして、「体験していただいてありがとうございました」という流れになる。設定や課題が全く変わる。内

田委員や伊藤委員のご発言を伺っていると、かなり防災意識が醸成されてきている地域であると感じる。区内ではかなり高いレベルで自主的に進めている地域もあれば、まず体験していただくことから始めて行かなければならない地域もある。地域によって段階が違う。それが中原区の実状だ。できれば全ての地域で一律にレベルを上げていき、ボトムアップを図っていくのが理想だ。意識がまだ低い地域では、まずイベントなどをやって関心を持っていただく目的で取組を考えるということになると思う。

井上部会長　意識の高い地域と低い地域、どちらが中原区には多いのか。

事務局　ほとんどはまだまだの地域だ。

内田委員　避難訓練は各地区でやっており、経験者も多いと思う。ただ、避難所開設訓練はほとんどの方が経験しておらず、自分の問題とも感じていない方が多い。自然災害の被害想定では、中原区は一部急傾斜地域がある程度で、津波による浸水等は想定されていないため、安全だと思われがちだ。高層ビル群も少なくとも建前はかなり大きな地震がきても、大丈夫ということになっている。

危機感を煽ったり、「さぁ来てください」と呼びかけるのではなく、「日頃の生活の中で意識を持とう」と呼びかけ、参加してくれた人の意識を高めていければと思っている。避難所運営訓練をもっと多くの人が体験すれば、実際の災害でも動けるようになると思う。私の町会ではそんな体制ができつつある。やはり成熟度、意識の違いが大きい。決して大きな災害が想定されている地域ではない。

伊藤委員　新しく転入してくる人達は、自分の所は安全だと思っている傾向が強いように思う。井田地域には一部標高が低い地域があるのですが、地域の説明を小学校でした所、「えっ！？私たちの地域は 1 階が浸水してしまうの？」と驚いている方が多かった。その他、近年開発が進んだ地域なので、一部土砂崩れの危険性がある地域や、盛土の上に家を建てて、傾いてしまった例もある。

内田委員　知らない人、参加経験の無い人でも、訓練に来てお手伝いができる形が一番良いかと思う。

井上部会長　そういう気運をつくっていきたい。先ほどの中森委員の発言が気になっている。参加しても心に残っておらず、実際の取組に繋がっていない例があるのではないか。自主性を持たせるために何をすればいいのか。今行われている避難所運営訓練はどうなっているのか。まず参加のきっかけづくり。来てもらう工夫が必要であり、企画するイベントの中身、方向性がぶれないような形が必要だ。

内田委員　「遊びではない」という意識もある。意識がある人が集まってくれて、終了時にご苦労さまとお互いに言い合える形が良い。

井上部会長　意識のある人だけを集めるのであれば、遊びは必要ないと思う。ただ現状を考えれば、まだそこまでいっていない地域が多いのではないか。

内田委員　運営面でもピリピリするのではなく、息抜きが必要だと思う。集まって、取り組んだあとに反省会や交流会などまで結びつけることができたら良い。

コンサルタント　区民会議としてどう提案をするか。きっかけづくり、避難所運営訓練などの方向性は見えてきたと思う。

梅原副部会長　人を呼び寄せるためにはある程度遊びも必要ですが、意識が高い人にとって

は、物足りなくなってしまう恐れがある。

コンサルタント　ターゲットの異なる、初めての方に来ていただくための提案と、参加していただいた方の自主性に繋がる提案を別の取組として考えてはどうか。

内田委員　客寄せはお祭りで良い。必要性を感じている人が集まらないと、文句ばかりの会になってしまう可能性がある。「だったらあなたがやりなさいよ。」と言いたい。本当に何を自分がしたらいいのか、考え、体験する機会を積み重ねていく。つまらないという言葉ばかりに捉われてはいけないと思う。

井上部会長　例えば、避難所運営訓練の体験を川崎フロンターレで一度やった宿泊体験などと一緒に行うことは可能か。

事務局　もしそういう提案になれば、可能になるよう動きたいと思う。ただ地域への押し付けではなく、公募などの形になるかと思う。

　導入として、まず防災に関心をもってもらうということであれば、テーマや内容、例えば、受付の設置、炊き出しの準備など、行政がお手伝いして設定し体験する。朝になったら、行政への引き継ぎを行う防災キャンプなどが考えられる。

内田委員　避難者登録について、役所からいただいた書式では、家族構成など記入欄が多すぎ、訓練で使ってみたら、「何でここまで書かなければならないんだ」とまず揉めてしまい、大変だった。やってみてわかったことで、良い経験ができた。「自己責任で書ける範囲で良い」ということにできれば良かった。

　訓練には、「何をやるのかわからないけど、手伝いたい」という意識をもっている人が来てくれれば良いと思う。

井上部会長　そういう方もかなり意識が高い方だと思う。そこまでの人がどれだけいるか。意識のある方ばかり対象にしていては、なかなか新しい人が巻き込みづらいと思う。

内田委員　地域が安全だと思っている人は来なくていいと思う。100 人規模の避難所に 200 人など、全員来られては困ってしまう。まず運営の基礎をつくらなければならない。

井上部会長　やる気のある人を取り込むだけでは、担い手の発掘がなかなか進まないように思う。意識が無い人に意識を持ってもらうことも必要だ。

内田委員　もちろんそれが必要でないと言っているわけではないが、安全だと思っている人を巻き込もうとすると大変です。

井上部会長　実際の災害は誰が被害を受けるかわからない。地域で意識をもって、たくさん訓練をしてきた人がまず亡くなったり、負傷してしたりすることも想定される。ある程度、誰もが担い手の中心となれる形が理想だ。

内田委員　そこに至るまでに、いくつか段階があると思う。訓練を受けた方々の半分も避難所に来られるかどうか、実際には分からない。まず自分の安全、自分の家の安全を確保してから集まろうという想定になっている。避難所を運営できるかわからない。しかし、意識のある方がいたら、ここを手伝ってくださいとできるようにしておく。そのためにも「顔見知りになっておこうよ」ということかと思う。おにぎり一個を取り合うのではなく、分かち合えるような場所にしていく。だからあなたも意識を持ちましょうということをしたい。

井上部会長　避難所訓練をやる時にどんな方を集めるか。意識のある方だけという考え方で

は厳しいのではないかと思う。ターゲットの設定が、意見一致していないところか。

内田委員　極論過ぎたかも知れない。地域としては避難所訓練を始めたばかりの過渡期で、先が見えない面もあり、まだあまり広げすぎない方が良いというのが私の地域についての個人的な見解だ。この部会での取組のターゲット等の話とは異なる。

今やっている日中の訓練を、夕方や宿泊も含めた形でやってみてはという新たな課題はいただいたように感じている。実現すれば新たな経験になる。

伊藤委員　宿泊訓練は中原区内でも井田中学校などで実践例がある。

鈴木委員　学校施設をお借りした訓練というのは難しい面もあるかと思う。井田中学校の例は地域のおやじの会が中心で活躍されている。

伊藤委員　井田中学校区は二つの町会で構成されているので、まとまりやすいという点がある。たくさんの町会が集まっている地域ではそう簡単にはいかない。それぞれの町会に井田中学校の PTA の OB がいて、「おやじの会」を構成し、熱心に一緒に活動してくれている。

鈴木委員　その学校のその時の校長先生の考え方にも大きく左右される面がある。

伊藤委員　東日本大震災以来、大分変わってきていると思う。

鈴木委員　ダメなところはまだまだだ。PTA からかなり働きかけたが、そこまで責任が持てないと、セキュリティなどの問題から実現しなかった例がある。

事務局　校長会などの場にまず働きかけてみる方法があるかと思う。区民会議から、いつ頃、どんな訓練を行いたいか、働きかけ、手を挙げてくれる学校を募集するなど。

コンサルタント　避難所運営訓練は大きな提案の一つとなりえるが、どのような形を目指すのか、例えば防災キャンプなのかなど、もう少し検討が必要である。大きな提案と合わせて、いくつか細かい提案をしてみても良いと思う。例えばこれまでの意見を活かす形であれば、罹災経験者の体験談を聞く機会を区内で増やしていくなどの提案である。また、今回はこれまであまり話題にならなかったが、前回話題になった安否確認については、実際には避難所で行うのは特に災害発生直後は非常に難しい。そこで高津区の「無事です、安否確認カード」など、いくつか参考となりそうな事例の資料を用意させていただいた。（その他、資料に基づいて、横浜市の避難所多国語掲示の例など説明した。）

訓練をするとなるとどうしても成功させたい、万全の準備をして臨みたいという心理が働くが、実際の災害は準備ができるまで待ってはくれない。むしろ失敗した訓練こそ、きちんと振り返りや話し合いができれば学べることが多く、とにかくやってみることが重要だと考えても良いかと思う。先ほどの内田委員の避難者受付の書式の話などが良い例かと思う。

井上部会長　防災キャンプを軸に、そこで行える様々な講座や企画等を考えてみてはどうか。初めての参加者を増やす方向性であれば、夏休み中に開催し、子ども達と一緒に保護者も参加できるような内容、方向性で考えてみるのもありえる。避難所の掲示や仮設トイレをつくってみる。サッカー教室もやる。担い手や地域などはまだこれから詰めていかなえればならないが、実現できるのではないか。

事務局　以前、ふろん太くんのラジオ体操には、結構人が集まった。そんな企画も併せてみても良いかもしれない。

コンサルタント　災害は夜に起こる可能性もある。夜間に防災訓練を行う事例もある。意外と実施例が少なく、やってみるといろいろな発見がありそうだ。

内田委員　夏場に開催し、宿泊を含めずに 9 時頃に解散する形なら、実現へのハードルも下がりそうだ。

コンサルタント　地域の公園で屋外映画上映会を開催して親子を集め、併せて防災訓練をした例も聞いたことがある。

梅原副部会長　映画会といっても、最近は人が集まるか疑問だ。興味が無い人を訓練に引きずり出す方法と、意識がある人を育てる方法と二つ考えていくことが重要かと思う。

内田委員　どちらか選ぶということではなく、幅広くやっていければ良い。まだ経験したことのない方の意見を聞きながら、新しい企画を考えてみたい。

事務局　今日出た意見を資料に盛り込んで、次の全体会への部会経過報告とさせていただきたい。また、今日は情報発信などについてはあまり意見がなかったが、もし意見があれば、12 月 19 日（月）くらいまでに事務局の方へいただきたい。

（以上）

４　その他（事務連絡）

○今後のスケジュールの確認（参考資料３）

○第 3 回・第 4 回課題調査部会の日程の決定

調整の結果以下のように決定した。

第 3 回　2 月 16 日（木）午後

第 4 回　2 月 22 西（水）午後

５　閉会

（以上）